

## 2-16-3 関ヶ原決戦のあらまし

### ① 両軍の配置と兵力

大垣城及びその周辺にいた両軍の主力は 14 日夜、石田、島津、小西、宇喜多隊の順に、野口、栗原、牧田を経て関ヶ原の陣地笹尾山、小池、北天満山、南天満山へそれぞれ着き、完了したのが午前 4 時頃であった。とにかく、雨の中、夜通し遠廻りの行軍は相当の疲労も見られたが直ちに陣地を固めた。それに対し、東軍は早朝 2 時頃福島隊、黒田隊が竹中隊の案内で出発し、4 時頃には福島隊の先頭が着き、西軍の最後尾宇喜多隊と接触し、大混乱を起こした。こうして東西両軍が東西 4 キロメートル、南北 2 キロメートルの関ヶ原陣地に着き、開戦を待った。

東軍の兵力は徳川家康ほか 74,000 人(そのうち南宮山軍に備えた池田、浅野隊ら 19,965 人)、西軍の兵力は石田三成ほか 82,000 人、関ヶ原陣地での午前中は東軍が約 53,000 人、西軍が 56,000 人とほぼ互角。午後になって小早川隊らの裏切りで東軍が 19,965 人増え、西軍はそれだけ減って、東軍が 94,000 人、西軍が 37,000 人となった。西軍の陣地は高地で鶴翼の陣で、戦いには有利であったが兵力の差、意欲の差が地の利を生かすことができなかった。

### ② 決戦の様相

午前 7 時頃、雨は上がったものの深い霧が一面に立ち込め、数間先も見えない。機先を制することが兵法にあるが、お互いに陣地に着いたばかりで、土地感も弱く、西軍にとっては夜行軍の疲れもあり、相手の出方を見守っていた。8 時頃、霧も次第に晴れてきた。東軍は外様大名に先陣の功を取らせるものかと、井伊直政は家康の四男松平忠吉の初陣を飾らせんと、屈強の家臣 30 余名をつれ、福島隊の前面に出かけた。ところが先陣を受けていた福島隊の先頭可児才蔵に発見され「今日の先陣は福島隊である。誰も先に通すことはできない。」と止めた。直政は「総大将松平忠吉公の敵状偵察に案内するところだ。」と偽り、そこより方向を右へより宇喜多隊に発砲した。これを見た福島正則は 800 人の銃手をつれ、宇喜多隊を攻めた。この頃、西軍は南天満山、笹尾山、東軍は丸山にそれぞれ大きな音ののろしを上げ戦端が開かれ、あちらこちらから関の声、螺の音が大きく鳴り響いた。

南天満山の宇喜多隊は五段に構えて戦った。なかでも明石全登の率いる隊は強く、福島隊を追い返した。その左に位置した藤堂、京極隊、さらに寺沢隊は大谷、平塚隊を攻めた。織田、古田、佐久間隊は北天満の小西隊と戦い、その後織田隊は福島隊の背後から不破の関付近に出て、藤堂、京極隊と共に平塚隊と交戦し、一進一退の激戦を繰り返した。

笹尾山の石田隊へは黒田、竹中隊、さらに田中、加藤、金森親子隊が向かった。三成は本陣前 2 町ほどに竹柵と濠を造り、その前に猛将島勝猛隊、柵の内に蒲生郷舎隊を置き、三段構え、これに対し黒田隊は竹中隊の案内で、山麓をつたって三成隊の左側を突進した。島隊は二手に分け、自ら一隊を率い、山麓からの黒田隊へ迫り、これを討たんとした。これを見た東軍の田中、加藤隊は黒田隊を援けんと三成の本陣へ突進、また、黒田隊は名銃手 10 数人を小高い山麓を密かに迂回し、島勝猛隊の側面から鉄砲を撃ち、島隊を混乱させ、さしもの勝猛も弾に当たり、柵の内につれ入れられた。その隙に黒田、竹中、田中隊ら三成本陣へ突進した。しかし蒲生隊らの頑強な兵に撃退され、細川、加藤、金森隊の援護で防戦し、一進一退の激しい戦いが続いた。

家康は桃配山の本陣では戦況を充分知ることができないこと、南宮山軍の傍観を確認して本陣を前に進め、11時頃には陣場野に着いていた。正午になっても松尾山の小早川隊が動かない。痺<sup>しびれ</sup>を切らし、麾下と福島<sup>しづま</sup>の鉄砲隊に松尾山へ向けて一斉射撃を命じた。これによって迷っていた小早川秀秋は松野主馬の反対を押し切って山を下り、大谷、平塚隊へ向かった。これに呼応して脇坂、朽木、小川、赤座隊も裏切り、後ろから大谷隊らを攻めた。この時、平塚隊は藤古川の前より後ろにさがり前から横から後ろからの敵と戦い、3度までも撃退したが多くの兵士を失い、力つき、ついに戸田、平塚も戦死した。大谷は平塚からの冥土の土産の首を手にし、小早川の裏切りを恨みながら自害し、湯浅五助に介錯させ、三浦喜大夫にその首を埋めさせた。こうして西軍の一角が崩れるや、宇喜多、小西、石田隊と次々敗れ、その多くは伊吹山麓方面へ敗走した。残った島津隊は陣容を整え、敵の本陣を突破して、伊勢路から堺に出て鹿児島に帰った。

天下分目の関ヶ原の大合戦はわずか7時間ほどで東軍の勝利となった。この戦いで西軍約8,000人、東軍約4,000人が鉄砲弾、弓矢、槍、刀によって殺され、負傷者もこれ以上あったと思う。したがって関ヶ原の戦場跡には血みどろな、首のない、手足のない人体や馬、さらに動けない者も右往左往し、全く地獄絵そのものであった。慶長7年(1602)関ヶ原古戦場に生まれた合川少年は、世の無情を知り、本陣職を譲って出家し、無難禅師となった。

#### <引用文献>

太田三郎・中島勝国『関ヶ原合戦と美濃・飛騨』35～36頁 岐阜県歴史資料保存協会発行 平成12年